

『ゴーラクナート語録』研究

—「サブディー」(42-100)の本文と和訳

橋 本 泰 元

はじめに

本稿は『東洋学論叢』第32号の拙稿に引き続いて、Pitāṃbaradatta Baṛathvāla, *Gorakha-Bānī*, Prayāga:Hīndī Sāhitya Sammelana, 2017 (=1960, tritīya saṃskaraṇa)[prathama saṃskaraṇa 1942]所収の、ゴーラクナートによる教説の二行詩サブディー (sabadī) 全189偈（主要テキストである写本 a 以外の写本にあるサブディーを加えると276偈）のうち第42偈から第100偈までの本文と和訳を提示するものである。

なお、前号と同様に、訳文中の（ ）は筆者の言い換え、〔 〕内は筆者による補足を、*は筆者の訳注を示す。

本文と和訳

avadhū pūraba disi vyādhi kā roga pachima disi mirtu kā sogā /
dachina disa māyā kā bhoga uttara disi sidha kā joga // 42 //

遁世者は東方で熱病〔を患い〕、西方で死の悲しみ〔を味わう〕。
南方で幻影の享樂〔に浸り〕、北方で成就者のヨーガ〔を得る〕。

dhūtārā te je dhūtai āpa bhiṣyā bhojana nahīṃ saṃtāpa /
ahūṭha paṭana maiṃ bhiṣyā karai te avadhū siva purī saṃcarai // 43 //

詐欺によっておのれを騙し、^{ごっしき}乞食の食物が苦しみでなく。

三個半の街で乞食するならば、〔その不誠実な〕遁世者はシヴァの街を徘徊する。*

- * 「三個半の街」の意味が不明であるが、原著者は「3.5 腕尺の身体という街」と解釈している。しかし、この行の後半部分の意味と文脈的な整合性がなく、この一行の意味は不明瞭である。

gharabārī so ghara kī jāṇai bāhari jātā bhītari āṇai /
 saraba nirantari kāṭai māyā so gharabārī kahie nirañjana kī kāyā // 44 //

家住者とは家のことを知っている者、〔家の物が^が〕外に行けば内に持ち帰る。

すべての幻影を常に切り払う、そのような家住者は無染なるもの^{むぜん}の身体〔を持つ者〕と言われる。*

- * 「無染なるもの」nirañjana は最高実在である至高なるシヴァ神のこと。

girahī so jo girahai kāyā abhiantari kī tyāgai māyā /
 sahaja sila kā dharai sarīra so girahī gaṅgā kā nīra // 45 //

家住者とは身体を把捉している者なり、内奥の幻影を捨て去って。*

本然なる戒^{ほんねん}を把持する身体、その〔ような身体を持つ〕家住者はガンガ一川の水〔の如く清浄なり〕。

- * 「家住者」の原語は girahī < grhin であり、「把捉している」の原語は girahai < √grh であり、掛詞となっている。

amarā niramala pāpa na punni sata raja bibarajita sunni /
 sohaṃ haṃsā sumirai sabada tihim̐ paramāratha ananta sidha // 46 //

不死、無垢、罪悪、福德なく、純質・激質を捨離して虚空なる者。

「それは我、ハンサ（鳥）なり」ということばを憶念する者は、殊勝なる無窮の成就者〔となる〕。*

- * 『「それは我、ハンサ（鳥）なり」ということば』の意味は、原著者の解釈によれば、ヨーガ行者が深い瞑想のなかで、無声無音で行う最もレベルの高い念誦である「命息念誦」(ajapājāpa) である。

pāṣaṇḍī so kāyā paṣālai ulaṭi pavana agani prajālai /

byanda na deī supanaiṃ jāṇa so pāṣaṇḍī kahie tatta samāṃna // 47 //

異端 [のヨーガ行] 者とは身体を曲折し、氣息を逆流させ [ヨーガの] 火を燃え立たす。

ビンドウ (精液) を夢のなかで漏らさず、そのような異端者が真実のなかに没入している。*

* 「異端者」の意味が文脈上不明であるが、ここでは古典ヨーガではないハタヨーガを行じる人たちの自虐的あるいは謙遜する表現であろうか。

manavāṃ jogī gāyā maḍhi pañca tatta le kanthā gaḍhī /

ṣimā ṣarāsaṇa gyāna adharī sumatī pāvaṛi ḍaṇḍa bicāri // 48 //

意 (manas) というヨーガ行者が身体という祠に [住し]、5大要素の檻褘布を作った。

忍耐という座具、知識という杖、思念という下駄、杭という思考 [をもつて]。

cālata candavā ṣisi ṣisi paṛāi baiṭhā brahma agani parajalai /

āḍai āsaṇi goṭikā bandha jāvata prathmī tāvata kandha // 49 //

月は動き徐々にすべり落ちるが、プラフマン (明知) の炎は不動に燃える。

堅固な坐法 [によってヨーガ行者は] 悉地 [を得]、大地が存するまで身体が存する。*

* 「悉地」の原語 goṭikā (< guṭikā) bandha は、原注によればマントラで浄化した丸薬をヨーガ行者が口に含むと姿を隠せる境地をいう。

yahu mana sakatī yahu mana sīva yahu mana pañca tatta kā jīva /

yahu mana le jai una mana rahai tau tīni loka kī bātāṃ kahai // 50 //

この意はシャクティ、この意はシヴァ、この意は五要素でできた個我。この意をもって至高の境地に至れば、[行者は] 三界のことがらを語る。*

* 「至高の境地」の原語は、unamana < unmanas。

avadhū nava ghāṭī roki lai bāṭa bāi baṇijai causatḥi hāṭa /
 kāyā palaṭai abicala bidha chāyā bibarajita nipajai sidha // 51 //
 遁世者よ、九門への道を閉ざせ、六十四の市で風の商い〔が始まる〕。*
 肉体が堅固になり、〔肉体の〕影がなくなり成就者となる。

* 原著者の解釈によれば、「九門への道」は「肉体の九孔」、「六十四の市で風の商い」は「肉体の六十四の関節に風（気）が通う」である。

avadhū damma kauṁ gahibā unamani rahibā jyūṁ bājabā anahada tūraṁ /
 gagana maṇḍala maiṁ teja camaṁkai canda nahimṁ tahāṁ sūraṁ // 52 //
 遁世者よ、氣息を調え至高の境地におれば、奏でられざる音がラッパの
 ように鳴るだろう。
 虚空界に、月もなく太陽もないのに、光が輝く。*

* 「虚空界」とは、ハタヨーガの身体観が述べる頭頂にある「ブラフマンの孔」
 (brahmarandhra) の意味。

sāsa usāsa bāi kauṁ bhaṣibā roki lehu nava dvāraṁ /
 chaṭṭhai chamāsi kāyā palaṭibā taba unamaṁniṁ joga apāraṁ // 53 //
 呼気、吸気を〔徐々に〕弱め、九門を閉ざせ。
 しばらくの間、肉体を堅固にすれば、至高のヨーガは無上なり。

avadhū sahaṁsra nārī pavana calaigā koṭi jhamaṁkai nādaṁ /
 bahatari candā bāi soṣyā kiraṇi pragaṭī jaba ādaṁ // 54 //
 遁世者よ、何千もの脈管に風が通れば、何千万ものナーダ（音）が鳴り
 響く。
 原初の光線が現れれば、七十二個の月を風が吸収する。

amāvāsa kai ghari jhilimili candā pūnima kai ghari sūraṁ /
 nāda kai ghari byanda garajai bājanta anahada tūraṁ // 55 //

(28)

新月のとき月は明滅し、満月のとき太陽が〔明滅する〕。
ナーダのときビンドゥが轟き、奏でられざる音のラッパが鳴る。

ulaṭanta nādaṁ palaṭanta byanda bāi kai ghari cīnhasi jyanda /
sunni maṇḍala tahāṁ nījhara jhariyā canda suraji le unamani dhariyāṁ // 56 //

下方にゆくナーダと上方にゆくビンドゥ、風のなかに不死〔の要素〕が見える。

空界に〔甘露が〕滴り落ちれば、月は太陽をともなって忘我の境地を保つ。*

* 難解な二行詩であるが、ハタヨーガの教説によれば次のように考えられる。すなわち、月とナーダは女性原理、太陽とビンドゥは男性原理である。月と太陽の結合によって至高の境地の状態となると、空界（ブラフマンの孔）で甘露が滴り始める。ナーダは微細な音素の活動態であり、次第に粗大な形態に開展して創造の質量因となる。その創造を規定する粗大な形態が源泉に向かう。そして、下方に向かっているビンドゥが上方に向かい、時間の影響を多く受ける氣息（風）のなかに不死なる要素が見える。

avadhū prathama nārī nāda jhamaṅkai tejaṅga nārī pavanaṁ /
sītaṅga nārī byanda kā bāsā koi jogī jānata gavanaṁ // 57 //

遁世者よ、第一の脈管でナーダが鳴り響き、熱き脈管に風が通う。
冷たき脈管にビンドゥが住す、希なるヨーガ行者のみ〔その〕動きを知る。*

* 原著者の解釈によれば、「第一の脈管」は人体の中央を通るスシュムナー・ナーリー、「熱き脈管」はピンガラー（スーリヤ）・ナーリー、「冷たき脈管」はイラー（チャンドラ）・ナーリーを意味する。

uṭhanta pavanaṁ ravī tapaṅgā baiṭhanta pavanaṁ candaṁ /
dahuṁ niranitari jogī bilambai binda basai tahāṁ jyandaṁ // 58 //

スーリヤ〔・ナーリー〕の風は活発で、チャンドラ〔・ナーリー〕の風は止まっている。

両方に等しくヨーガ行者は依止する、ビンドゥが住すところに不死〔の要素がある故に〕。*

*原著者は「両方に等しく」を「両者から離れて〔中央を通る〕スシュムナー・ナーリーに」と解釈している。

ketā āvai ketā jāi ketā māṅgai ketā khāi /

ketā rūṣa biraṣa tali rahai goraṣa anabhai kāsauṁ kahai // 59 //

なんと多く〔の修行者〕がやって来ては去っていき、

なんと多くが〔食物を〕要求して食べていることか。

なんと多くが樹下にいることか、ゴーラク〔ナート〕は無畏〔の境地〕を誰に説いたらよいか。

paṛhi dekhi paṇḍitā rahi deṣi sāraṁ aṇaṁiṁ karaṇiṁ utaribā pāraṁ /

badanta goraṣanātha kahi dhū sāṣi ghaṭi ghaṭi dīpaka ṣaṇi pasū na āṁṣi // 60 //

パンディットよ、読んで学んだ精髓を見続けよ、己の行為によって〔それを〕実現せよ。

ゴーラクナートは言う、個々の個我に〔ブラフマンの〕光輝があり瞬時ののちに眼から消える、と誰に証言しよう。*

*原典では、2行目の後半句の読みとして ghaṭi ghaṭi dīpaka (balai) ṣaṇi pasū na (peṣe) āṁṣi と () 内を補って挙げているが、典拠が明示されていない。筆者には、この () 内は原著者が意味を判然とするために補ったものと思われる。この読みに従えば、後半句は「個々の個我に〔ブラフマンの〕光輝が輝くも、動物は眼で〔これを〕見られない」の意味になる。筆者は原典の pasū を pas (ペルシア語起源 ind. 「のちに」) の変形と解釈し、原著者は paṣu の変形と解釈している。

susabade hīrā bedhila avadhū jibhyā kari ṭakasāla /

auguṁna madhe guṁna karilai tau celā sakala saṁsāra // 61 //

正しきことばによって金剛石を貫け、遁世者よ、舌を無垢にして。

悪徳のなかで徳をなせ、そうすれば全世界が〔おまえの〕弟子となる。

abharā thā te sūbhara bhariyā nījhara jharatā rahiyā /

ṣāṇḍe thaim̃ ṣurasāṇa duhelā yūṃ sataguri mārāga kahiyā // 62 //

満ちていなかったものがすべて満ちた、〔甘露の〕滝が落ち続け。
砥石で鋭い剣が〔さらに〕尖った、正師が説いた道（方法）のように。

pyaṇḍai hoi tau pada kī āsā baṃni nipajai cautāṃ /

dūdha hoi tau ghṛta kī āsā karaṇīm karataba sārām // 63 //

肉体があるなら足があり、森に四足獣が生まれる。
乳があるならギー（精製バター）があり、行為と振る舞いが精髓だ。*

*非常に不可解な二行詩である。原著者の解釈は次ぎのようである。すなわち「至高のブラフマンは各々の個我に遍充している。このことを世俗的な粗大な意味に理解すれば、至高のブラフマンはどこかに〔必ず〕存在する。しかし、このように理解すれば、最高アートマンの身体のどこかの場に〔それが〕得られることが必ず期待される。〔世俗の〕人々は最高アートマンを獲得するために森を徘徊している。もし、ブラフマンの現証が森においてのみ生じるとすれば、それは四足獣のなかにも見つけられる期待をしなければならない。もし乳のなかに最高アートマンが存在するのであれば、ギーのなかに期待する必要がある。しかしながら、このような表面的な事柄によっては最高アートマンは得られない。その根本の方法は行為・振る舞い、実践と理論すなわち正しい生活方法なのである」。

mana mair̃ rahiṇām̃ bheda na kahiṇām̃ bolibā aṃṃṛta bām̃ṇīm̃ /

āgilā agani hoibā avadhū tau āpaṇa hoibā pām̃ṇīm̃ // 64 //

心に留めよ、秘密を口外せず、〔他者に快い〕甘美な言葉を言え。
先に火があれば、遁世者よ、自ら水になれ。

unamani rahibā bheda na kahibā pīyabā nīm̃jhara pām̃ṇīm̃ /

laṅkā chāḍī palaṅkā jaibā taba guramuṣa lebā bām̃ṇīm̃ // 65 //

至高の境地におれ、秘密を口外するな、〔甘露の〕滝の水を飲め。
ランカー島を超えて行けば、導師の口からことばを聞ける。*

*「ランカー島を超えて行けば」の原語のうち palaṅkā は、原著者の脚注によれば、写本 c の読みでは paralaṅkā である。

nagrī sobhanta bahu jala mūla biraṣā sabhā sobhanta paṇḍitā puraṣā /
rājā sobhanta dala pravāṃṇīm

yūṃ sidhā sobhanta sudhi budhi kī vāṃṇīm // 66 //

街は多くの池や木々で美しく、集会はバンディットたちで輝きを増す。
王は信頼のおける兵隊によって威厳があり、同様に成就者は聡明な理性
のことばによって輝く。*

*「信頼のおける」の原語 pravāṃṇīm は、原著者の解釈に従い、pramāṇi <
pramāṇika の派生と解した。

biralā jāṇanti bhedaṃnibheda biralā jāṇanti doi paṣa cheda /

bilarā jāṇanti akatha kahāṃṇīm biralā jāṇanti sudhibudhi kī bāṃṇīm // 67 //

不二なる秘密を希なる人しか知らず、二元の止滅を希なる人しか知らな
い。

語られざる物語を希なる人しか知らず、聡明な理性のことばを希なる人
しか知らない。

uttarakaṇḍa jāibā sunniphala khāibā brahma agani paharibāṃ ciraṃ /

nījhara jharaṇairṃ aṃmṛta pīyā yūṃ mana hūvā thīraṃ // 68 //

ウッタラーカンドに行き空なる果を食べよ、ブラフマンの火を衣として
着よ。

滝のごとく落ちる甘露を飲め、こうして心は安定する。*

*「ウッタラーカンド」は、現ウタラーンチャル・プラデーシュ州とヒマーチ
ャル・プラデーシュ州に含まれる地域の名称で、古来、ヨーガ行者の修行の
聖地とされている。この二行詩は、旧来のヨーガ行者がウッタラーカンドに
赴き、滝の水を飲み自然の果物を食してヨーガ行に専念していることを批判
して、自己の身体内部にある頭頂の孔ブラフマンドラというウッタラー
カンドに赴き、黄褐色の衣ではなくブラフマンの火を衣として身につけ、頭
頂の孔から滴り落ちる甘露を飲み、空なる果を食せ、とゴラクナートが説
いているものと考えられる。

(32)

hindū dhyāvai dehurā musalamāna masīta /

jogī dhyāvai paramapada jahām dehurā na masīta // 69 //

ヒンドゥー教徒は寺院で礼拝し、ムサルマーン（イスラーム教徒）はマ
スジッド（礼拝所）〔で礼拝する〕。

ヨーガ行者は最高位を念想し、そこには寺院もマスジッドもない。

hindū āṣaiṁ alaṣa kauṁ tahām achai na ṣudāi // 70 //

ヒンドゥー教徒はラーマと言ひ、ムサルマーンはフダーと言ひ、〔ヨー
ガ行者は〕不可視なるもの〔と言ひが〕、そこにはラーマもフダー
もない。^{*}

*この詩節は一行しかなく、語彙も少なく異常である。おそらく書写生の誤記
と思われる。原著者の注記もない。内容的には直前の二行詩に連なるもので
あるので、意識した。

pyaṅḍai hoi tau marai na koī brahmaṅḍe deṣai saba loī /

pyaṅḍa brahmaṅḍa niranṭara bāsa bhaṅḍanta goraṣa machyandra kā dāsa // 71 //

身体に〔最高アートマンが〕あれば誰も死なず、〔それを〕宇宙（ブラ
フマーンダ）の中に人みな見る。

〔それは〕身体と宇宙に遍く存在すると、マツツェンドラの弟子ゴー
ラクは言う。

baiṭhā avadhū loha kī ṣūṅṭi calatā avadhū pavana kī mūṁṭhī /

sovatā avadhū jīvatā mūvā bolatā avadhū pyaṅjarai sūvā // 72 //

坐す遁世者は鉄の杭〔の如く不動で〕、動く遁世者は風の拳〔の如く速い〕。
寝ている遁世者は生きながら死んでいる〔かの如く〕、話している遁世
者は鳥籠の鸚鵡〔の如し〕。

goraṣa kahai suṅahure avadhū jaga maiṁ aiṣaiṁ rahaṅḍāṁ /

āṁṣaiṁ deṣibā kāṁnaiṁ suṅibā muṣa thaiṁ kachū na kahaṅḍāṁ // 73 //

ゴーラクは言う、聞け、遁世者よ、世間ではこうして住め。

眼で見、耳で聞くだらうが、口では何もしゃべるな。

nātha kahai tuma āpa rāṣau haṭha kari bāda na karaṇām /
yahu juga hai kāmṭe kī bārī deṣi deṣi paga dharaṇām // 74 //

〔ゴーラク〕 ナートは言う、おまえは自己を守れ、論議に固執するな。
この世は棘の畑、よく見て足を運べ。

goraṣa kahai suṇauṁ re avadhū susūpāla thaim̃ ḍariye /
le mudigara kī sira maiṁ melai tau binahī ṣūṭi mariye // 75 //

ゴーラクは言う、聞け、遁世者よ、シシュパーラを恐れよ。
〔彼の〕 棍棒を頭に受ければ、〔寿命の〕 尽きることなく死んでしまう。*

* 「シシュパーラ」は『マハーバーラタ』にはクリシュナの敵として登場するが、ここでは原著者の注釈に従って、「死神」(Kāla, Yama)の意味に解釈したほうが文意に合う。

「〔寿命の〕 尽きることなく」の原語 binahī ṣūṭi の ṣūṭi(=khūṭi) は、原著者の注釈によれば khuṭṭam (「壊れた」) の派生形である。なお、khuṭṭam は Nareś Kumār (ed.) *Apabhraṁśa-Hindī Kośa* (Indo Vision Pvt. Ltd., 1987), Vol.1, p.273 によれば、Hemacandra 編纂のアパブランシャ語辞典 *Deśi Nāmamālā* (c 1150), 2.74 の記述で、Skt. √trut, p.pt. の派生とある。

ḍṛṣṭi agre ḍṛṣṭi lukāibā surati lukāibā kāmna /
nāsikā agre pavana lukāibā taba rahi gayā pada nirabāmna // 76 //

眼の前から視覚の対象を隠し、耳の前から聴覚の対象を隠せ。
鼻の前から嗅覚の対象を隠せ、そうすれば涅槃の境位が残る。

avadhū manasā hamārī gīnda boliye surati boliye caugānām /
anahada le ṣelibā lāgā taba gagana bhayā maidānam // 77 //

遁世者よ、私の心はいわば球、〔私の〕 憶念はいわば打球槌。
奏でられざる音をもって遊び始めたら、虚空は競技場となった。*

* 理解しにくい二行詩であるが、ハタヨーガの修練法をポロに喩えて表現している。「奏でられざる音」は馬の隠喩、「虚空」は頭頂に想定されるブラフマランドラの隠喩と考えられる。

pañca tatta sidhāṁ muḍāyā taba bheṭilai nirañjana nirākāraṁ /

mana masta hastī milāi avadhū taba lūṭilaim̃ aṣai bhaṇḍāraṁ // 78 //

五大要素を成就者は剃り落とし、無染、無相なるものと出会った。
心という酔象を掌中に収めれば、遁世者よ、無尽の宝蔵を探れる。

aradha uradha bici dharī uṭhāi madhi sunim̃ maim̃ baiṭhā jāi /

matavālā kī saṅgati āi kathanta goraṣanā paramagati pāi // 79 //

下方（呼気）と上方（吸気）の間に〔氣息を〕保ちおき、中央の空（ブ
ラフマランドラ）に坐した。

陶醉者（シヴァ）との同席を得て、ゴーラクは言う、最高の帰趨を得た。

ḍaṇḍī so je āpa ḍaṇḍai āvata jāti manasā ṣaṇḍai /

pañcaur̃ indrī kā maradai māṁna so ḍaṇḍī kahiye tata samāṁna // 80 //

杖を持つ者（出家者）とは、自己を戒め、去来する心を破碎する。
五知覚器官の驕慢を抑える杖を持つ者は、真実に冥合した出家者と言う。

pāyā lo bhala pāya lo sabada thāṁna sahetī thīti /

rūpa saṁhetī dīsaṇa lāgā taba sarva bhāi paratīti // 81 //

得たり、良いものを得たり、ことば〔によって至高〕の境位を伴った状
態を。

〔それが〕形態をもって見え出し、すべてが明らかになった。

aradhanta kavala uradhanta madhye prāṁṇa purisa kā bāsā /

dvādasa haṁsā ulaṭi calaigā taba hīṁ joti prakāsā // 82 //

下方の蓮華〔の中から〕上方の〔蓮華の〕中に、氣息というプルシャが
入れば。

十二のハンサ鳥が逆〔の内面〕に飛び、そのとき光輝が発する。*

* 「蓮華」は、ハタヨーガが説く身体内に想定される神経叢チャクラのこと判断できる。「十二のハンサ鳥」は、意味が不明であるが、現著者は氣息の意味にとっている。

āsana baisibā pavana nirodhibā thāmna māmna saba dhandhā /
badanta gorakhanātha ātamām vicāranta jyūṁ jala dīśai candā // 83 //

座を組み、氣息を抑えること、〔導師の〕地位と名誉はすべて生業なり。
ゴーラクナートは言う、アートマンを考察すれば水面に映る月の如し。

goraṣa bolai suṅire avadhū pañcauṁ pasara nibārī /
apaṇī ātmām āpa bicārī taba sovau pāna pasārī // 84 //

ゴーラクは言う、聞け、遁世者よ、五大要素の拡がりを払え。
己のアートマンを自ら考察せよ、そうして脚を広げて（ゆっくり）眠れ。

asāra nyandrā bairī kāla kaisaiṁ kara rakhibā gurū kā bhaṅḍāra /
asāra toṛau nindrā moṛau siva sakatī le kari joṛauṁ // 85 //

〔過度の〕食事と睡眠は敵の死神、いかにして導師の宝蔵を守ればよいか。
食事を少なく睡眠を抑え、シヴァとシャクティを合一させよ。

taba jāṁnibā anāhada kā bandha nā paṛai tribhuvana nahimṁ paṛai kandha /
rakata kī reta aṅga thaimṁ na chūṭai jogī kahatām hīrā na phūṭai // 86 //

奏でられざる音を統御したら分かるだろう、三界は崩れず五蘊も崩れず*
精液も肢体から落ちず、ヨーガ行者が金剛石は壊れずとすることも。

*この行を現著者は、「奏でられざる音を獲得したら、三界にはヨーガ行者の障
碍がなくなり、身体の崩壊がなくなるであろうと理解せねばならない」解釈
している。

sabada eka pūchibā kahau guru dayālaṁ biridhi thaimṁ kyūṁ kari hoibā bālaṁ /
phūlyā phūla kalī kyūṁ hoī pūchaimṁ kahai to goraṣa soī // 87 //

一つのことばを訪ねん、答えあれ、憐れみ深き導師よ、老人からどうし
たら少年になれようか。

咲いた花がどうして蕾になれるか、かく尋ねて答えるはゴーラクなり。

suṅauṁ ho devala tajau jañjālaṁ amiya pīvata taba hoibā bālaṁ /
brahma agani sīñcita mūlaṁ phūlyā phūlyā phūla kalī phiri phūlaṁ // 88 //

(36)

聞け、院主よ、煩わしい俗事を捨てよ、甘露を飲めば少年になれる。
ブラフマンの火で根を潤せば咲き終わった花が蕾となり再び開花する。

ulatāyā pavanāṁ gagana samoi taba bāla rūpa parataṣi hoī /
udai grahi asta hema grahi pavana melā bandhilai hastiya nija sāla bhelā // 90 //

氣息を逆流させ虚空（ブラフマン孔）に収めよ、さすれば少年の姿が目
に見える。

日出の家に日没〔をもたらし〕、雪の家に風を通せば、縛られた象が自
分の舎で怯える。*

*二行目の意味が不明である。原著者は「日出の家に日没をもたらず（＝ム
ラーダーラに位置する太陽を沈める）ことによって、また雪（＝月）の家＝
ブラフマン孔に氣息を混入させることによって、縛ってある象（＝心）が自
分の象舎に（そこに象＝心はヨーガの成就のためにいなければならない、す
なわちアートマンを知らないの）やって来る」と解釈しているが、これも
分かりにくい。「怯える」の原語 bhelā の bhel を bhīru と解釈した。Cf. J. Platts,
A Dictionary of Urdu, Classical Hindi and English, p.200.

bārā kalā soṣai solā kalā poṣai cāri kalā sādhai ananta kalā jīvai /
ūrama dhūrama jotī jvālā sīdhi sādhanā cāri kalā pīvai // 91 //

12のカラーを吸い取り6のカラーを涵養すれば、4のカラーが成就し
無限のカラーが生きる。

深い暗闇に光が輝き、悉地を修しつつ4のカラーを飲む。*

*「カラー」はプラナー聖典の記述によれば、月の満ち欠けの16部分の意味で、
その名称は amṛtā, mānadā, pūṣā, puṣṭi, tuṣṭi, rati, dhṛti, śāsinī, candrikā, kānti,
jyotsnā, śrī, pṛīti, āngadā, pūrṇā, pūrṇāmṛtā である。月には甘露があり、それを神々
が飲んでいると考えられている。自分にカラーが増していき、満月に16カラ
ーで月は満ちる。黒分で、15日間に蓄積された甘露を agni, sūrya, viśvadevā,
varuṇa, vaṣaṭkāra, indra, devarṣi, ajaikapāt, yama, vāyu, umā, pītṛgaṇa, kubera,
paśupati, prajāpati の順番で神々が飲み干す。新月のとき月の第16番目のカラ
ーが水と薬草に入る。これらの薬草を食し水を飲んで、雌牛たち動物は乳を
出し、ヨーグルトができて精製バター（ギー）ができる。護摩の献供によって、

ギーは vāyu の助けを得て再び月に至る Cf. śarmā, Rānaprasād, *Paurāṇik Koś*,
Vārāṇasī: Jñānamaṇḍal, vi.sam. 2028, p.92.

この二行詩の意味は分かりにくい。現著者の解釈によれば「1 2 のカラー（ム
ーラーダーラにある太陽）を飲み乾せ（これによって太陽は甘露の滴を飲み
乾すことができなくなる。こうして）16 カラー（サハスラーラにある甘露の
源である月）を涵養せよ。こうして4 カラー（太陽の上方の月の甘露）が成
就する。これによって無限のカラーが満たされ、すなわちブラフマンを直証
できる人生を得られる」。

asādhā sādhanta gagana gājanta unamaṇi lāgatanta tāli /

ulaṭanta pavanaṁ palaṭanta bāṁṇiṁ apīva pīvata je brahmagyāṁṇiṁ // 91 //

成就し難きものを修練し、虚空を〔奏でられざる音で〕轟かせ、至高の
境地〔の三昧〕に専念し。

氣息を逆流させ、ことばを逆さまにし、飲み難きもの（甘露）を飲んで
いる者は、ブラフマンを知る者なり。*

* 一行目末尾の tāli は、tāri として Platts の辞書によれば absorption in thought or
devotion(p.305), *Bṛhat Hindī Koś* によれば samādhi としてあり、ここではその
意味に解釈した。

「氣息を逆流させ、ことばを逆さまにし」の意味を、原著者は「氣息を逆流
させ、スシユムナー脈管に戻し」と解釈している。

aleṣa leṣanta adeṣa deṣanta arasa parasa te darasa jāṁṇiṁ /

sunni garajanta bājanta nāda aleṣa leṣanta te nija pravāṁṇiṁ // 92 //

描き難きものを描き、見難きものを見る者は、〔最高実在を〕直接見る。
虚空を轟かし、ナーダを鳴らし、描き難きものを描く者は、自己の知覚
根拠〔によって最高実在を知る〕。

nihacala ghari basibā pavana nirodhibā kade na hoigī rogi /

barasa dina maimṁ tīni bara kāyā palaṭibā nāga baṅga banāsapati jogi // 93 //

家に不動に坐し、氣息を抑えれば、決して病人となることなし。

年に三回、身体を若返らせよ、鉛と錫と薬草を用いて、ヨーガ行者よ。*

* 二行目後半句の原語 *nāga, baṅga* には訳語のような意味はないが、原著者の解釈を援用した。

śoḍasa nārī candra prakāśyā dvādasa nārī māmnaṁ /

sahaṁsra nārī prāṁṇa kā melā jahāṁ asaṁṣa kalā siva thāṁnaṁ // 94 //

16の脈管（イラー）に月が輝き、12の脈管（ピンガラー）に太陽〔がある〕。

一千の脈管（スシムナー）に氣息が集まり、そこに無数のカラーであるシヴァが住す。*

*（ ）内の言い換えは原著者の解釈に従った。

avadhū īrā māraga candra bhaṅjai pyaṅgulā māraga bhāṁnaṁ /

suṣamanāṁ māraga bāṁṇiṁ boliye triya mūla asthāṁnaṁ // 95 //

遁世者よ、イラー脈管を月と呼び、ピンガラー脈管を太陽〔と呼ぶ〕。

スシムナー脈管をヴァーニー（サラスヴァティー）と呼んで、この三者が根本所なり。

avadhū kāyā hamārī nāli boliye dārū boliye pavanaṁ /

agani palitā anahada garajai byanda golā uṛi gaganāṁ // 96 //

遁世者よ、われわれの身体は鉄砲で、氣息は言わば火薬。

導火線で火を点ければ奏でられざる音が鳴り響き、ビンドウの弾丸が虚空に飛ぶ。

kāji mulāṁ kurāṁṇa laḡāyā brahma laḡāyā bedaṁ /

kāpaṛī saṁnyāsī tīratha bhramāyā na pāyā nṛbāṁṇa pada kā bhevaṁ // 97 //

カーズイー（イスラーム法官）とムッラー（学僧）はクラーンを学び、ブラーフマンはヴェーダを学んだ。

巡礼者、サンニャースイーを聖地が欺き、涅槃の境地の秘密を誰も得なかった。*

*「巡礼者」の原語 *kāpaṛī* は、ガンゴットリー（ガンガー川の源流近く）で

水を汲み天秤棒で担いで運び、その聖水をすべての巡礼地に捧げて歩く巡礼者を意味する (*Hindī Śabd Sāgar*, p.902)。

devala jātrā sunni jātrā tīratha jātrā pāṃṇīṃ /
atīta jātrā suphala jātrā bolai aṃṃṛta bāṃṇīṃ // 98 //
寺院への旅は虚しい旅、聖地への旅は水〔への旅に過ぎず〕。
超越者への旅は実多き旅、甘露のことは〔への旅〕*。

*「超越者」は、ヨーガ行の成就者か、最高実在の二つの意味に考えられる。

adharā dhare bicāriyā dhara yā hī maiṃ soī /
dhara adhara paracā hūvā taba utī nāhīṃ koī // 99 //
下方を上方に考察した、上方の中にこそ、それ（最高実在）がある。
上方と下方が冥合すれば、そちらのほうに何もない*。

*この二行詩の意味も理解しにくい。原著者によれば「下方（空なるブラフマン孔）にわれわれは最高実在（ブラフマン）の存在を考察した。この身体にもそれは存在する（ムーラーダーラからサハスラーラに至るまでそれは存在する）。ムーラーダーラに位置するクンダリーニーがサハスラーラに住すシヴァに冥合すれば、修行者にとって自己の経験知のほかには何も残らない」。

ūbhā mārūṃ baiṭhā mārūṃ mārūṃ jāgata sūtā /
tīni loka bhaga jāla pasāryā kahāṃ jāigau pūtā // 100 //
[おまえが] 立っ³ていようが殺す、座っ³ていようが殺す、目覚めていよ
うが眠っ³ていようが殺す。
三界に女陰の網を広げた、どこへ行くのか、息子よ*。

*死神 kāla の挑発の言葉と思われる。